

# ウサギの毛と皮膚の特徴

飼うウサギ(アナウサギ)の赤ちゃんは、生まれたときは赤裸で毛が生えていません。生後4日くらいで毛が生えはじめます。

新生子ではまずはじめに、保護毛が生え、次に下毛が生えます。この柔らかい毛は数日で毛が揃い、5~6週まではホワホワです。そして、6~8ヵ月齢で大人の毛になります。正常な被毛は、短くて柔らかい下毛と、それを司る保護毛からなっています。

毛の生えていないところは、鼻の先・陰のう部・鼠径のうだけで、足の裏にも毛が生えています。全身を包むすかすかの毛は、保温の役目をしています。毛には油があり、水がかかってもしみ込まないようになっています。

1年に1~3回、主に2回(春と秋)抜け毛が見られ、夏毛と冬毛に生え変わります。換毛は頭部からはじまり、尾のほうへと進んでいきます。

メスのウサギはあごの下に「肉垂」と呼ばれる大きな皮膚のたるみがあります。出産の前になると、この肉垂・胸・肢・足のつけ根の毛をむしって巣作りをします。これは、巣に毛を敷くことのほか、乳首がわかりやすくなるようにという目的を持っているので、この時期には毛が容易に抜けるようになっています。毛が薄くなったり、なくなったりしても病気ではありません。

尾の裏の毛は白く、危険を感じると尾を立て、白いところを見せて仲間知らせたりしますし、プロポーズのサインにもなります。

犬や猫と違う特徴は、ウサギは足の裏にフットパッド(肉球)がないことです。足の裏全部がブラシ状の毛で覆われ、ふかふかでクッション役をしているところです。

口吻部には感覚毛があり、食べ物を探したり、地下や暗やみで移動するときに触覚として役立ちます。

皮膚には汗腺がありますが、あまり体温調節には関わっていません。ウサギの汗腺は、犬や猫などより発達が悪く、肩・背・脇腹などの体の前のほうにあり、下腹部や尻にはほとんどありません。脂腺(皮脂を分泌して毛や皮膚面を湿し、柔らかく弾力性を持たせる役目がある)はよく発達しています。

またウサギは、アイランドスキン現象というのが見られます。生理的なものですが、皮膚が部分的に肥厚して、その部分の毛の発育も早くなるのです。原因は不明ですが、遺伝的なものにも、季節にも、換毛の時期にも関係していると言われています。

## 毛と皮膚のトラブルにはどんなものがあるか

皮膚と毛に異常が出てくる病気はいろいろありますが、主なものについてお話します。

細菌によるもの

A 湿性皮膚炎...のどの下や肉垂のたるんだところが蒸れて、皮膚が赤くなったり、毛が抜けたりします。

B 飛節びらん...遺伝・肥満・床の材質・運動不足・高齢などが原因で、足の裏に皮膚炎が起き、毛が抜けたようになります。

C 咬傷...ケンカなどにより毛が抜けたり、皮下に細菌が入って化膿し、膿瘍を形成して皮膚が腫れます。

D スナッフ...くしゃみ・鼻汁が出るため、鼻の下やその周りの皮膚が汚れて毛が抜けることがあります。前足で鼻汁をこするので、前足の先の毛がベタベタしていることもあります。

真菌によるもの

皮膚糸状菌症...真菌(カビ)により、皮膚はかさかさしてかさぶただできたり、脱毛したりします。

カンジダ症...酵母菌の一種が皮膚で増殖し、皮膚炎を起こします。

外部寄生虫によるもの

ノミ・ツメダニ...ノミやツメダニ、ズツキダニがつくと、その刺激で痒がったり、皮膚に炎症が起きたり、毛が抜けたりします。

耳ダニ...ウサギキュウセンヒザンダニの寄生により、耳の中に黒いかたまりやかさぶただ見られます。臭くなり痒いので、耳の外にひっかき傷ができたり、頭を振ったりします。

コクジウム症...コクジウムという原虫が、腸粘膜に寄生する病気です。そのため下痢を起こし、お尻の周りの毛が汚れたり、毛が抜けたりします。

その他

不正咬合...歯のかみ合わせが悪く、歯が伸びてしまうと口のなかに傷ができて、よだれが多く出ます。その結果、口の周りの毛が汚れたりします。

毛球症(胃停止)...毛の抜け替わりの時期や出産の準備で毛をなめたりむしったりして、毛をたくさん飲み込んだり、胃腸の運動機能が低下したりすると起きます。胃のなかに毛が多くなったり、固まったりします。流れにくい状態になると、閉塞が起きたり、流産を起こしたりします。

腫瘍...皮膚に乳ガンなどの腫瘍ができると、しこりにより皮膚がふくれてきたり、ゴツゴツしてきたり、分泌物でゴワゴワしたりします。

## 毛の手入れの方法

ウサギは普通、シャンプーが嫌いです。嫌がるウサギを無理に押さえつけてお風呂に入れて、背骨や足を骨折させて来院することがあります。毛と皮膚の手入れは、汚れがひどい場合以外は、グルーミングを中心にしましょう。

利点

ウサギは、グルーミングをすることで、さまざまな利点があります。

- 1) 毛球症(胃停止)の予防...ムダ毛を取るようになるので、飲み込む毛の量が減ります。
- 2) コミュニケーション...1日1回、時間を決めてブラッシングすることはスキンシップになります。話しかけながら優しく毛をといてあげると、初めは嫌がっていたウサギも、だんだん慣れるようになります。
- 3) 血液循環がよくなる...血行がよくなり、毛づやもよくなります。
- 4) 病気の早期発見...毎日ブラッシングをして、ウサギにさわっていることで、汚れ・腫れ・傷・脱毛・ノミなどの皮膚の異常を早く見つけることができます。

注意すること

ウサギの皮膚は意外とデリケートで炎症を起こしやすいので、力を入れ過ぎないように気をつけます。無理に押さえつけたり、毛がからんでいるのに引っばったりすると、ブラッシングは嫌なこととして記憶されます。しかりつけながら行ったりせず、気持よく楽しいことになるように、優しく声をかけながらするのがコツです。

毛玉をつまみ上げてハサミで切ろうとすると、皮膚も持ち上がっていて一緒に切ってしまうことがありますから気をつけます。毛玉と皮膚の間にクシを入れて、その上を切りましょう。毛玉のできやすいところは、しっぽの周り・前足のつけ根・耳の後ろ・のどなどです。放っておくと汚れがたまりやすく、皮膚炎の原因になります。体のあちこちをいつもさわって、毛玉を小さいうちに発見しましょう。

ブラッシングのしかた

1日1回、場所と時間を決めて行いましょう。換気のいい掃除しやすいところで、5分くらい、嫌がらない程度に毎日少しずつ患継続していくことがポイントです。

アンゴラやカシミアのような長毛種は、毛がからみやすいので必ずていねいに行います。

スリッカーブラシは、力を入れ過ぎると皮膚を傷つけやすいので注意が必要です。クシの場合も力を入れなくて、角度をつけずにすべらすようにとくといいでしょ。短毛種ではムダ毛が取れにくいので、すべり止めつきの手袋・ラバーブラシ・固く絞ったタオルなどでグルーミングするといいでしょ。

毛に敏感な人はマスクをつけて行ったほうが無難です。

## コラム

### ピークは一度ではない

先月号で、ウサギの歯の不正咬合のはオスが多い話をしましたが、今回は、不正咬合のピークは一度ではない、という情報をお届けします。

臼歯の過長症といえば、私たちの病因でもウサギの病気 No.1 といってもいいくらい。この病気で来院するウサギを調べたデータが、先日学会で発表されました。大きく二つのパターンがあるそうです。

初めてこの病気が出るのは、1歳齢が一番多く、次に来る年齢は4歳で、ここでもまたピークを迎える。

資料によると、初めのピークが1歳の理由は、先天的な素因や食餌である。小さい頃から不適切な食餌を与えていると、ちょうど1歳を過ぎた頃から症状が出はじめるのだ。

また、4歳でもう一つのピークが出る原因は、先天的な素因がなくても、長いこと不適切な食餌を与えていると、歯根への負担が増え、ウサギの老齢化に伴って歯周の異常が誘発されることにある。

アンケートの結果では、不適切な食餌の内容とは、過剰なペレット・野菜中心の食餌・果物・おやつなどです。ウサギの好きなものばかりをたくさん与えていたウサギが、不正咬合になりやすかった。つまり、乾し草の摂取量が少ないと、臼歯が順調にすり減ることができずに、不正咬合を引き起こすというわけだ。

臼歯の過長症は、症状が出てからでは完治するのが難しい。私たちの病院に来るウサギのゴローちゃんラブちゃんは、3週間に1回、繰り返し麻酔をかけて臼歯を削っている。それほどまめに来院する必要があるのです。ウサギだけでなく、飼い主さんも負担が大きけれど、放っておくと痛くなって食べなくなるので、2人とも“ウサギ貯金”をして、その日に備えている。

どうしたらいいかというと、小さい頃から乾し草が主食だということをウサギに教え、一生涯、乾し草中心、ペレット制限、好物のおやつもなるべくやめる。一に乾し草、三、四がなくて五に乾し草くらいの気持ちで、乾し草の摂取量を増やすことが、臼歯の過長症の最善の再発予防策である。

ところが、先ほどの2匹とも、ペレット大好き、乾し草嫌い、あげてもブイッと横を向く。この学会の資料を飼い主さんに見せてあげたら、「うちのウサギに読んで聞かせたいわ」。

そんなわけで、生まれつき歯は大丈夫という自信のあるウサギも安心しないで乾し草を続け、ピークを乗り切ろうという次第である。